

大村の壁に泣く幼い在日
朝鮮人兄妹の悲痛な祈り

大村の壁に泣く幼い在日
朝鮮人兄妹の悲痛な祈り

パパをかえして／

1978年9月5日第1刷発行

著者 朴ミリ・フォン・ユミ・
キョング

編者 崔 昌 華

発行所 名古屋市中区上前津2-9-14 久野ビル 風媒社
振替・名古屋5616 電話 (052) 331-0008

乱丁・落丁本はお取りかえいたします。・印刷・日大印刷 ・製本・飯島製本

0036-3019-7302

装幀・沢居曜子

朴^グミリ・フオン・ユミ・キヨンギ 著

パパをかえして

“大村”の壁に泣く幼い在日朝鮮人兄妹の悲痛な祈り

風媒社

まえがき

一九七七年十二月七日、新大阪駅の喫茶店で楊禮（ヤン・イエ）さんとその叔父さんといわれる人と会った。その時、二人は、楊さんのご主人の朴煥仁（パク・ホアンイン）さんのことについて、「主人はある罪を犯して服役し、今年十一月九日に刑期を終え仮出所したところ、入管（入国管理事務所）より強制退去令が出て長崎の大村収容所に移送・収容されてしまい、二月下旬に出航する送還船で韓国へ強制送還されてしまいそうです。法務大臣に直接会って妻子五人の苦しみを訴えるなど、できるかぎりのことをしましたが、どうなるのやら。私たちが家族はどうすればいいのでしょうか。子どもたちが泣いているのです」と悲痛な面持で私に訴えた。

それから二人に数回会ったのち、翌年、つまり、今年の一月八日に名古屋で子どもたち四人に会った。子どもたちがきちんと礼儀正しく私に挨拶するのを見て、私も同じ年頃の子どもを

持つ親として、しのびない涙にさそわれた。この時、子どもたちは高校三年の長男をはじめとして、長女（高一）、次男（中二）、次女（小二）と、いずれもまだ幼く、食べざかり、育ちざかりで、さぞかし母親は大変であろうと察しられた。この子どもらに何の罪があつて、一家の柱であるパパと一緒に暮せないのだろうか。これまで、パパが一日も早く家に帰ってくることを一日千秋の思いで苦しい生活に堪えて待っていたのに、まさかと思つた大村収容所にパパが連れられて行き、自分たちが生まれ育つた日本から強制退去させられて、もう共に住むこともできないのではないか、と思う子ども心を見ると、四人の子どもたちの顔をまともに見ることもできなかった。

朴さんが子どもたちと別れたのは五年前、長男が中学二年、いちばん下の子が三歳の時であつた。母は昼も夜も、それこそ寢食を忘れて働き通し、骨身をけずるような毎日の生活の中で身体をこわして倒れることもしばしば。子どもたちは新聞配達やアルバイトをして家計を助けるという日々の連続。無邪気で何の心配もなく、のびのびと育つべき子どもたちが、今、大村の壁の厚さをひしひしと肌で感じているはずだ。この子どもらにはパパと共に暮すという、人間としての最も基本的な権利はないのだろうか。

生まれてからこれまで、一時期を除いて、そのほとんどを日本で過した朴煥仁さんは、韓国

には生活の基盤はない。もし彼が韓国に強制送還されてしまい、家族があとを追って韓国に渡ったとしても、四十歳を過ぎた、しかも、このような前歴を持つ彼に一家五人を支える収入が得られる職がそうたやすく見つかるとは考えられないし、日本で育った子どもたちは向うでは言語も通じないであろう。一家五人が路頭に迷うことは火を見るよりも明らかである。強制送還は即一家の永久離散を意味する。

朴煥仁さんは一九三五年八月、下関市大坪で生まれ、父親が炭鉱などに徴用で働かされたため、福岡県山田市や大分県中津市を転々、終戦の翌年、四六年六月、十一歳の時、両親に連れられて韓国に帰国した。しかし、それから七年後の五三年、朝鮮戦争が終った直後の九月に名古屋に在る長兄を頼って自力入国して逮捕され、大村収容所へ送られた。そのおりは運よく仮放免となり、六一年六月に法務大臣より特別在留許可を得た。その後、結婚、四人の子どもが生まれた。

六一年から彼は自分で事業を經營、かなりの資産を持つにいたったが七二年、詐欺などにかかり事業に失敗、全財産を失った。多額の債務を負い、その整理のために金融業者から六百万円を借り、やがて、そのうちの三百万円を何とか返済したが、残りの三百万円の返済に窮した。

彼はこのへんの事情を私あての手紙にこう書いている。「悪徳金融の取り立てがいかにか厳しかったものであるか、筆舌につくせないものがあります。……私の返済見通しが無いのを見ると、いろんな悪事の仕事（覚醒剤の運び屋など、または詐欺等）に加わるように迫ってきた……」。何とかその追及のほこ先をかわしてはいたものの、押し寄せる波にのまれるように、ついに保険金あての放火に加わることを余儀なくさせられてしまった。「最終的に私が事件に同意したのは放火現場が田んぼの真中で他人の建造物に類焼の恐れがないとの確信で良心の慰めがあったからです。」

この事件の経緯については、巻末に収めた朴さんの手紙を見ていただきたい。手紙の中には、このような事件を起す人とは思われない朴さんの人柄と苦渋の思いがにじみ出ている。

七四年五月、放火、詐欺の罪で徴役五年の判決をうけ、三重刑務所で服役。その間、厳しい獄中生活の中で自らの行為を反省、妻や子どもたちの暖い励ましと勇気づけによってキリストの愛に目覚め、一級生活者（模範囚）として三年余で仮放免となった。それも束の間、大村収容所への送還という事態は、本人はもとより家族にとって計りしれない衝撃であった。

ところで、朴さんの両親はいま韓国から名古屋の長兄のところに来られ、長兄が老後の面倒をみておられる。朴さんが五三年に日本に来た時も長兄の献身的な努力によって特別許可を得

た。

長兄をはじめ家族、親族および関係者一同は朴さんが妻やかわいい子どもたちとしあわせに暮せるようにと、特別在留許可のための嘆願署名運動をすすめながら、もう一刻も猶予してはいられないと、朴さんの「送還執行停止申立て」を東京地方裁判所に提訴せざるを得ない立場に追いこまれ、不本意ながらも、藁をもつかみたい一心で、七八年二月四日、その手続きをとった。だが三月十七日、執行停止処分（送還停止）の申立てが却下されてしまったので、すぐまた三月二十三日、東京高裁へ控訴、現在審議中であるが、もし棄却されれば、すぐ送還されるという危機的現実の中にある。

朴さんが囚われの身となってから今日にいたるまでに四人の子どもたちから朴さん宛に送られた手紙は百数十通にも及ぶ。その中から朴さん自身が適宜選んだ五七通を収録することにしたわけだが、そのいずれにもパパを慕う暖い息づかいと、励ましと、「パパ早くかえって／＼」という哀しい切実な願いがこめられている。

「パパとあの時、別れる時、もう悲しくて悲しくてたまりませんでした。パパが行ってしまった時、もうパパの姿が見えなくなったときは、なんともいえないつらい気持ちで、こんな悲しい別れをしたのは初めてです」（長女・ユミ）

この悲痛な叫びが胸にジーンときて、思わず眼がしらが熱くなってくる。

また、小学校三年生の次女・ミリちゃんは、パパが病気で遠くの病院に入院しているのだと今も思いこんでいる。まだ小学校にも行かず字が書けなかった頃、兄や姉が手紙を書いているのを見て、手紙を書けない自分もどかしくてたまらず、やがて小学校一年になり、最初（一昨年）に手紙を書いた時には、「パパおげんきですか。ミリはげんきです」とせいいっぱい元気な大きな字で書いた。

この無心な少女の心を、願いを、すべての日本人に、いや世界中の心ある人々にわかっていただきたい。

この、いたいけな子どもたちの手紙を読んで、胸をつまらせない人はおそらくいない。

一人の人間が過去のあやまちを悔い改め、心から新しく真人間に生まれかわりたいと固く決心し、神に祈っている姿にふれる時、ある種のすがすがしさを私は感じるのである。朴さんは見事に更生した。このことは、本書に収録した数通の彼の書簡（家族や私に宛てた）を読んでもらえればわかっていただけだと思う。

しかし、このような哀しみは在日の韓国人・朝鮮人であるがゆえに負わねばならないものなのであろうか。人間が人間として差別されない社会はどうしたらつくることができるのか、ど

うか、みなさんご自身の問題としてお考えいただければ幸いである。

どうか、この不幸な家族の力になってやって下さることを心からお願ひしたい。

一九七八年六月十七日

北九州にて

編者 崔^{クァンニ} 昌^{チャン} 華^ハ

(在日大韓キリスト教小倉教会牧師)

●本書を読まれる方へ

一、本書の主人公である四人の子どもの名前、生年月日、現況等は次の通りです。

長男・バク・キョンギ。一九五九年十一月十二日生。今年高校卒。国立大医学部受験、涙をのむ。現

在は昼夜働きながら勉強中。十八歳。

長女・バク・ユミ。一九六一年七月十四日生。現在高校一年、十七歳。

次男・バク・フォン。一九六三年四月十三日生。現在中学三年、十五歳。

次女・バク・ミリ。一九六九年十一月二十五日生。小学校三年、八歳。

一、朝鮮語の個有名詞がときどき出てきますので、日本語の意味を付しておきましょう。

アボジ（お父さん）、オモニ（お母さん）、ハラボジ（おじいさん）、ハラモニ（おばあさん）、クナブジ（父方のいちばん上のおじさん）、クンジビ（本家、お父さんの実家）、コモ（父方のおばさん）、サムチュンまたはサンチュン（父方の結婚していないおじさん。しかし、本書の手紙の中に出てくる「サムチュン」は母方のおじをさす。母方のおじは正確にはウェサムチュン）、ウェスンモ（母方のおじさんの奥さん）、クンコモ（父方のおばさん）、

一、本書に収録した手紙は朴煥仁さんが百数十通の中から適宜選びましたので、未収録のものの方が多く、したがって全体の脈絡に欠ける面もあるかと思いますが、ご諒承ください。

パ
パ
を
か
え
し
て

目
次

まえがき

1 パパの夢を見ました——一九七三年

パパ誕生日おめでとう(フォン) 18 ステキな電ボウありがとう(ユミ) 19
パパ、もう38歳ですね(キョング) 20 パパの夢を見ました(ユミ) 22 パ
パがかわいそう(フォン) 24 楽しい食事ができるのはいつ?(ユミ) 26

2 父さんのこと信じてます——一九七四年

今もとても黒いよ(ユミ) 30 4月8日はママの誕生日です(フォン) 34
心の中にいるパパ(ユミ) 35 もしパパが帰ったら(ユミ) 40 ママにかわ
って台所で(ユミ) 43 学級委員になりました(フォン) 45 父さんのこと
信じてます(キョング) 47 心のこもったおすし、ありがとう(ユミ) 50
ユミは食いしんぼう(ユミ) 52 世界一よい子になります(フォン) 56 パ
パの願い、なんでも聞いてあげる(ユミ) 58 父さん、歯をくいしばって堪
えぬいて(キョング) 61

3 パパのパジャマを着ています——一九七五年

4

夢がいつぺんにさめてしまつて——一九七六年

部屋の中が泣き声でいっぱい(ユミ) 64 パパのパジャマを着ています
(キョング) 67 今ごろどんな夢みてるかな(ユミ) 71 約束だよ、家族旅
行してね(フォン) 73 ミリちゃんはいっぱい食べ、元氣そのもの(ユミ) 75
別れて三回目の誕生日がきました(ユミ) 77 暖いところで寝かしてあげた
い(フォン) 79 パパの顔変わったかな(ユミ) 81 音楽会に代表で出たけ
ど(ユミ) 84 兄ちゃんは新聞配達、兄弟力を合わせてます(フォン) 87
父さん、焼鳥で一杯やりたいね(キョング) 89

みりは一ねんせいになりました。はやくかえつてきてね(ミリ) 94 ぼくは
もうすぐ中学一年生(フォン) 96 必死でがんばるお母さん(キョング) 98
パパとママは世界一、こんなに信用されてるのよ(ユミ) 101 受験勉強で涙
が出そう(ユミ) 104 女の友達もまだいません(キョング) 107 夢がいつぺ
んにさめてしまつて(フォン) 110 オモニ(母さん)の身体が心配で(キョ
ング) 113

5 パパとママとねたいです——一九七七年一月～六月

パパとママとねたいです（ミリ）¹¹⁸ 学校の作文を送ります（キョング）¹¹⁹
ふとって、かわいいブタみたいです（ミリ）¹²⁴ ユミの祈る声が聞えました
か（ユミ）¹²⁸ ミリちゃんはあさねぼうです（ミリ）¹²⁹ 台所の手伝い、な
んとも思ってません（ユミ）¹³⁰

6 こんな悲しい別れは初めて——一九七七年七月～十二月

この試練は神の恵みです（キョング）¹³⁶ ホームダイジンのところへいきま
した（ミリ）¹³⁸ パパと二人で町を歩いてみたい（ユミ）¹⁴⁰ 韓国人に生ま
れてよかった（ユミ）¹⁴² アボジ（お父さん）に会えて、とても懐しかった
（キョング）¹⁴⁵ パパのおひざにのって、ラクチン、ラクチン（ミリ）¹⁴⁹
大の大大の大大すきなパパへ（ミリ）¹⁵¹ こんな悲しい別れをしたのは初
めてです（ユミ）¹⁵² クリスマスカードありがとう（キョング）¹⁵⁶

7 ミリ、泣かなかったよ——一九七八年

8 パパからの便り

今年こそはパパがわが家に（ユミ）¹⁶⁰ アボジ、あけましておめでとう（フ
 ォン）¹⁶⁰ パパの手紙よんでないちゃった（ミリ）¹⁶¹ 一生懸命書いたこ
 の手紙、どうか無事に届きますように／（ユミ）¹⁶² ミリ、泣かなかったよ
 （ミリ）¹⁶⁵

9 朴煥仁より崔牧師へ

みんなにみじめな思いをさせてごめんね¹⁶⁸ 青春時代は夢をもって／¹⁶⁹
 手紙を何度もよみかえし¹⁷² ママのことをよくきいて¹⁷⁴ 涙が出るほ
 どうれしかった¹⁷⁶ 胸が裂けるほど心が痛みます¹⁷⁸ 心の中で泣きまし
 た¹⁸⁰ みんなの夢ばかり見えています¹⁸²

事件の経緯など¹⁸⁶ 心から詫びる心境です¹⁹³ 毎日が不安で絶え間なく祈
 っています¹⁹⁵ 不安な気持ちから一瞬にして解放された喜び¹⁹⁷ 妻子の泣き
 声に男泣きました¹⁹⁹ 送還は死に等しく忍びがたい²⁰² 運命を待つばかり
 りです²⁰⁵ 不安に怯える毎日です²⁰⁶ 最悪の局面の到来²⁰⁸